



7月中旬から連日30度を超える暑さが続いた桑折町。その暑さと太陽の光で糖度が増した「あかつき」。「うちの桃は甘くておいしい」と長女の彩葉ちゃんも太鼓判を押します



朝一番に収穫した、とれたての桃。桃に近づいた瞬間、甘い香りがふわっと広がります

自然災害を機に、より丁寧に桃へ気を配るようになったと話す聡さん

令和元年から2年にかけての記録的暖冬の影響で、聡さんが育てる約3割の桃がせん孔細菌病に。数十年に一度と言われる事態に絶句——。しかし、「逆にこれが農業の面白さかもしれない」と前向きに捉えます。「70歳を超える叔父でさえも、いまだ毎年勉強だと言っている。自分はまだまだ。せん孔細菌病の被害を受けたことで、病はん部の切除の大切さが身に染みた。農業は、自然災害の影響を受けやすく、自分の思い通りにならない菌がゆさもある。周りの先輩方や仲間、果樹研究所の先生方に知恵を教わりながら、農業に



CASE 1 伊達崎（北郷）
八巻 聡さん、貞吉さん

「献上桃」を守り続けたい。

周りの先輩も、果樹研究所で出会う仲間も、とにかく志が高い人ばかり。「熱い思いをもって桃に向き合っている人が多いから、毎年『献上桃』という最高においしい桃ができるのだと思う。こんなに素晴らしい地域で、桃農家として働けることが嬉しい」と喜びをかみしめます。「10年やっても10回しか収穫できない。こう思うと、一年一年をもっと大切にしくちゃって。毎年どうなるかわからない自然環境と上手く付き合い、先輩方を見習って、より品質の高い桃を仕上げていきたい」と心の内に火を灯します。

一回一回の収穫に真心込めて
対する理解を深めたい。この先また何か起きて、おいしい桃づくりの糧にしていきたい」と力を込めます。「農業協同組合や伊達農業普及所、行政による支援もありがたい」。新規就農者を対象に、農業次世代人材投資事業を行う桑折町。一年に一度、三者と就農者が実際に畑を見て回り、栽培技術や経営に関する相談を受ける機会を設けています。「新規就農者への手厚い支援が、とても心強く励みになる」とうなずきます。

思いは、みんな同じ——

ふとした帰省が人生の転機に
6年前まで東京の飲食店で働いていた八巻聡さん。長期休みを利用して、叔父・八巻貞吉さんの家を訪れた際、貞吉さんの代で桃農家が途絶えてしまうことを知りました。「『献上桃の郷』として、以前に増して桑折の桃が盛り上がりつつあった。地元を離れたからこそ感じた、桑折の桃の格別なおいしさ。これが叔父の代で途絶えてしまうのはもったいない」。すぐに家族で話し合い、2年の準備期間を経て、桑折町へ移住することに。後継者になる道を選びました。「東京では、昼夜逆転の生活。仕事から帰っても、娘の寝顔しか見られず、もっと家族の時間を大切にしたいと常々思っていた。叔父の仕事に対する姿勢も後押しした。何十年も農業を営んでいるのに、飽きる様子が一切なく、むしろいつも楽しそうに、いきいきと仕事をしていた。まさに自分の求めていた働き方だった」と胸中を語ります。

自然災害も糧にすればいい
貞吉さんや周りの桃農家に支えられ、仕事が軌道に乗ってきた矢先、